

教育研究業績書

2017年05月29日

所属：看護学科

資格：教授

氏名：横島 啓子

研究分野	研究内容のキーワード
老年看護学	介護負担 認知症ケア
学位	最終学歴
博士（保健学）	杏林大学保健学研究科博士後期課程

教育上の能力に関する事項		
事項	年月日	概要
1 教育方法の実践例		
1. 高齢者疑似体験の実施とプレゼンテーション	2012年2月～2015年3月	「高齢者看護実習Ⅰ」（専門科目 2年後期 必修1単位）において、対象理解の目的で高齢者疑似体験を実施した。構内・構外での高齢者疑似体験により、学生は高齢者の生活の不便さを理解し、体が自由に動かせないことや音が聞き取れないことによる疎外感、すり足歩行による転倒の危険性などさまざまな現象に気づくことができ、写真や疑似体験時に折った折り鶴で手指の巧緻性の低下を伝えるなど自由な発想で高齢者疑似体験についての発表をおこなった。
2. 高齢者看護方法論授業におけるビジュアルエイドの導入	2011年9月～2014年1月	学生の学習意欲を向上させ、理解を深める目的で、ビデオや動画のビジュアルエイドを積極的に導入し症状等のメカニズムを学生の視覚に訴える工夫をした。また、学生間でのディスカッションを取り入れ、事前課題における学習成果を学生間で共有し、学習により得た知識をどのように臨床の場で活用するのかイメージ化を行うなど、学生が自立的に（アクティブに）知識を形成してゆける授業実践を心がけ、「わかる授業」を実現した。
3. 高齢者に関する新聞記事の収集と報告	2010年10月～2015年1月	核家族化が進み高齢者と同居する学生が少なく、高齢者の生活をイメージすることができない学生が多い。そこで高齢者に関する新聞記事を1ヶ月毎に収集し、毎月記事をまとめ自分の意見を述べることを課題として取り入れることで、年金・労働・健康など高齢者の生活上の問題について学生の関心を向けることができた。また、これら高齢者の生活上に起こっている社会的問題を自ら理解することで、「成年後見制度／日常生活自立支援事業」などの制度理解が容易となった。
2 作成した教科書、教材		
1. これからの高齢者福祉論－高齢者一人ひとりを大切にするために－「再掲」	1994年12月	
3 実務の経験を有する者についての特記事項		
1. 静岡県看護協会 「看護研究の基礎」講師	2013年7月～現在	静岡県東部地区の看護師を対象に、看護研究計画書作成を目指し、看護研究とは、文献検索の方法、研究方法、論文クリティーク、看護研究計画書作成について3日間の研修を実施している。
2. みしま教養セミナー「一般教養コース」講師	2012年7月	三島市教養セミナー「一般教養コース」の講師として、『ストレスマネジメント～心と体をリラックスさせましょう！』の講演を、三島市民約100名に行った。
3. 看護研究講師	2012年4月～2015年3月	静岡県内および神奈川県内の病院において、看護研究指導を行った。
4. 神奈川県看護協会 看護研究の基礎を学ぼう!!～看護研究計画書を作成しよう～ 講師	2012年2月～2013年2月	神奈川県看護協会教育研修「看護研究の基礎を学ぼう!!～看護研究計画書を作成しよう～」において、病院内で看護研究に取り組んでいる受講生（80名）に対し、看護研究計画書作成の具体的方法について指導を行った
5. 静岡県看護協会 平成23年度 東部地区支部看護研究発表会 講評講師	2012年2月	静岡県看護協会東部地区支部看護研究発表会において、講評をおこなった。
6. 神奈川県看護協会「看護研究のすすめ方」講師	2010年10月～2011年2月	神奈川県看護協会教育研修の「看護研究の進め方」において、病院内で看護研究に取り組んでいる受講生（90名）に対し、看護研究を实践する為の具体的方法について研修をおこなった。
7. 緩和ケア認定看護師教育課程 講師	2009年1月～2010年2月	神奈川県看護協会での緩和ケア認定看護師教育課程において、事例研究指導と研究発表会時の講評を務めた。
8. 看護教員課程 看護教育実習指導	2008年7月～2008年11月	神奈川県立保健福祉大学実践教育センター 看護教員課程 看護教育実習において、「老年看護学」の講義と実習についての指導をおこなった。
9. ホスピスケア認定看護師教育課程 講師	2007年1月～2008年2月	神奈川県看護協会でのホスピスケア認定看護師教育課程において、事例研究指導と研究発表会時の講評を務めた
10. 感染管理認定看護師教育課程 講師	2006年7月～2011年9月	神奈川県立保健福祉大学実践教育センター 感染管理認定看護師教育課程において、「感染管理教育」の中で教授法の指導と発表会の公表を務めた。
11. 神奈川県看護協会 訪問看護研修ステップⅠ 講師	2006年7月～2007年6月	神奈川県ナースセンター主催により神奈川県看護協会から依頼を受けた「訪問看護研修ステップⅠ（基礎編）」

教育上の能力に関する事項		
事項	年月日	概要
3 実務の経験を有する者についての特記事項		
12. 感染管理認定看護師教育課程 講師	2006年7月～2011年9月	において、参加者約90名に対して、「在宅輸液管理」について平成18年度と平成19年度の2年間講師を務めた。
13. 平成18年度 横浜市委託事業 訪問看護研究会「中重度療養支援研修会」講師	2006年6月	神奈川県立保健福祉大学実践教育センター 感染管理認定看護師教育課程において、「感染管理教育」のマイクロティーチングの指導と発表会の講評を務めた
14. 痴呆及び高齢者に関する教育講演シンポジウム：千葉痴呆研究会 シンポジスト	2005年6月	神奈川県看護協会が横浜市より委託された「中重度療養支援研修会」全8日間において、参加者40名に対して「在宅における静脈注射実施ポイント」の研修テーマについて講義をおこなった。
15. 神奈川県看護協会 訪問看護師養成講習会 講師	2005年6月～2005年11月	千葉県痴呆研究会主催の痴呆や高齢者ケアに携わる家族と専門職に対するフォーラムにおける「痴呆及び高齢者に関する教育講演シンポジウム」で、シンポジストを務めた。
16. 神奈川県看護協会「神奈川県看護職員海外調査派遣事前研修」講師	2004年9月	神奈川県ナースセンター主催により神奈川県看護協会から依頼を受けた「訪問看護師養成講習会」において、参加者約70名に対して、「在宅輸液管理」について講師を務めた。
17. 看護職に対する研究指導活動	2004年4月～2015年3月	神奈川県内の海外調査派遣研修参加者24名に対して、派遣前の事前研修として、「デンマークの福祉、医療、看護について」講演をおこなった
18. プロジェクト研究における共同研究員	2003年4月～2006年3月	神奈川県内及び静岡県内の病院において看護研究指導及び研究発表時講評を務めた。
19. 神奈川県看護協会標準看護計画作成検討委員会協力者	2002年8月～2003年6月	千葉大学看護学部看護実践研究指導センター老年看護研究部プロジェクト研究「老人施設における高齢者の日常生活機能を高める専門的看護援助方法の開発に関する研究」において、2年間共同研究員を務めた。
20. 神奈川県看護協会湘南地区ナースセンター 講師	1995年6月～1997年6月	その後、千葉大学看護学部看護実践研究指導センター開発研究部プロジェクト研究「医療施設における看護記録（監査）システムの開発に関する研究」において、1年間共同研究員を務めた。
4 その他		訪問看護ステーションに勤務する看護職が、看護計画作成のために活用できる情報を、インターネットで提供する「訪問看護支援システム」をシステム開発所と共同開発するための、システムおよび標準看護計画項目の検討に携わった。
		神奈川県看護協会湘南地区ナースセンター主催の「潜在看護婦研修」において、バイタルサインの講義をおこなった。

職務上の実績に関する事項		
事項	年月日	概要
1 資格、免許		
2 特許等		
3 実務の経験を有する者についての特記事項		
4 その他		

研究業績等に関する事項				
著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
1 著書				
1. New慢性腎不全患者のセルフケアガイド	共	2008年05月	学習研究社	慢性腎不全患者に対するセルフケアガイドおよび医療スタッフが患者指導に活用できるために、腎不全と透析療法の概略、慢性腎不全の保存期および透析療法期の実際、保存期、透析期および腎移植生着期の具体的な症状や問題点とその対策、腎移植療法、社会的支援について述べた。 B5版 全211頁 監修：飛田美穂 共著者：飛田美穂、北村真、谷亀光則、藤井穂波、牧島絹子、八木澤淳子、田中進一、伊藤優子、遠藤良江、横島啓子（執筆順） 本人担当部分：「第V章 透析患者のための社会保障制度と社会資源」(P.183～P.199)を単著 透析患者のための社会保障制度と社会資源について執筆した。
2. これからの高齢者福祉論－高齢者	共	2004年04月	保育出版社	現代の高齢者の生活実態、少子高齢社会における影

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・ 共著書別	発行又は 発表の年月	発行所、発表雑誌等 又は学会等の名称	概要
1 著書				
一人ひとりを大切にするために－				<p>響を踏まえ、高齢者福祉の意義、介護保険制度の意義、施設サービス・居宅サービスの役割、地域におけるコミュニティ作り、福祉・医療の専門職の高齢者ケアにおける役割など、高齢者の生活を守り支援していくために社会全体としての課題について探求した。</p> <p>B5版 全207頁 監修：浅井春夫 編者：水野喜代志 共著者：浅井春夫、原田理恵、岩松珠美、川端美佐緒、相原まり子、大熊信成、足立香織、先野祐史、倉田康路、横島啓子、他23名（執筆順） 本人担当部分：「第7章1節 居宅サービスの役割とそれぞれの特徴」（P.94～P.102）を単著</p>
2 学位論文				
<p>1. ストレス評価法としての唾液アミラーゼ活性測定の意味について－心拍変動解析結果との関連から－（博士論文）</p>	単	2009年03月	杏林大学大学院保健学研究科	<p>唾液アミラーゼ活性および心拍変動を同時に測定することにより、ストレス評価法としての唾液アミラーゼ活性測定の有用性の検証をおこなった。対象者100名に対してホルター心電図検査、職業性ストレス簡易調査票を用いたアンケート調査を実施し、その後、精神的作業負荷としてクレペリンテストを実施した。唾液アミラーゼ活性を調査票記入の前後、クレペリンテスト実施前、開始10分後および20分後に測定し、心拍変動の各指標（HF成分、LF/HF、RR間隔）の変化と比較した。唾液アミラーゼ活性は、心拍変動のHF成分およびRR間隔と逆の相関を示し交感神経活動の指標として有用性をもつことが確認された。</p>
2. 痴呆性高齢者ケアの在り方に関する研究－ユニットケアの場合－（修士論文）	単	2002年03月	大正大学大学院文学研究科	<p>第1章では痴呆性高齢者の援助方法について痴呆の概念と症状、原因と診断、基本的ケアについてまとめた。第2章では痴呆性高齢者の対策の経緯と概要についてまとめた。第3章ではユニットケアにおける有効性と課題として、ユニットケアに入所中の痴呆性高齢者19名を対象にケアの効果をDFDL尺度を用いて評価した。その結果、馴染みの関係性作りや役割の提供、個人のペースを大切にしたり関わりが痴呆性高齢者の症状安定に効果があったが、逆に介護者の力量が大きくケアの質に影響を及ぼしておいた。それらの結果を踏まえ、第4章ではユニットケアにおける質向上に向けて、入居者・スタッフ・環境の側面から考察を行なった。</p>
3 学術論文				
1. 病棟看護師と透析看護師への透析看護に関する研修の効果－透析室と病棟での連携を目指して－	共	2016年05月	臨床透析 Vol. 32 No. 5	<p>病棟看護師20名および外来透析室看護師12名に対し透析看護に関する研修を行い専門知識の主観的理解度を測定した結果、患者の状態把握に関する内容は研修後に有意に高かった。病棟看護師と透析室看護師の理解度の比較では透析室看護師の方が病棟看護師よりも平均点が高くなり、研修により透析室看護師が自身の経験を知識へと結びつけられたとと考えられる。さらに研修により、「アセスメントの大切さ」「申し送り提供する情報がわかった」等、部署間の連携の重要性も再認識できていた。</p> <p>共著者：掛谷和美、横島啓子、飛田美徳</p>
2. 介護老人福祉施設における看護・介護職員の看取りケアの実態－看取りケア研修のニーズと内容に焦点をあてて－	共	2016年04月	第46回日本看護学会論文 慢性期看護	<p>介護老人福祉施設で勤務する看護・介護職員156名に対して施設内で看取りケアを行うために必要なこと、受けた研修について質問紙調査を行った。分析はテキストマイニングを用いて行った。その結果、看護・介護両職種とも施設における看取りケアでは本人の意思以外に家族の適切な理解があつて初めて望ましいケアが提供できると考えていた。研修に関しては、看護職は具体的なケア方法を希望していた。介護職は経験内容がさまざまであるため、今後は看取りケアの概論的な内容と具体的な援助内容や家族対応に関する研修が必要である。</p> <p>共著者：横島啓子、黒川佳子、長沼淳、松浦美織</p>
3. 介護老人福祉施設における看護・介護職の看取りケアの実態調査	共	2016年03月	武庫川女子大学看護学ジャーナル Vol. 01	<p>介護老人福祉施設における看護・介護職の看取りケアの達成状況を把握し、各職種における看取りケアに関する解決すべき課題を明らかにすることである。調査方法は、全国200ヶ所の介護老人福祉施設に勤務する看護職400名、介護職600名を対象に、自記式質問紙によりアンケート調査を行った。調査内容は、厚生労働省看取り介護ガイドラインの看取り介護の実践8領域の33項目とした。分析結果は、看護職は5項目において介護職より達成状況が有意に高かった。介護職は、医学知識による判断や技術を要する項目で達成状況が低かった。また、有意差はなかったが両職種とも達成状況が低かった項目が「家族へのグリーフケア」であり、両職種への教育・研修に加え、施設毎のグリーフケア方法の確立や実施可能</p>

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
3 学術論文				
4. 要介護高齢者の生きる力の構成要素－特別養護老人ホームの利用者を対象にして－	共	2013年12月	順天堂保健看護研究	とする勤務体系の構築、看取り介護加算の算定要件において家族へのグリーフケアの実施を含める等、社会制度の見直しも求められる。 共著者：黒川佳子、横島啓子、長沼淳、松浦美織
5. 回復期リハビリテーション病棟におけるFIM評価の活用－看護計画へFIM評価結果を反映させる為の取り組み－	共	2011年03月	第41回日本看護学会論文集 成人看護Ⅱ	特別養護老人ホームに入居している要介護高齢者15人に半構造化面接を行なった結果、「自分らしい健康管理の習得」「生きるための心の支え」「新しい人間関係の形成」「新しい楽しみ、日常生活の獲得」「施設で生活することへの満足感」という5つのカテゴリーから、「身につけてきた自己の力」「新しい環境での生活を構築していく力」という構成概念が生成された。高齢者は介護が必要になって施設で生活していても、自分の体調の変化を自覚しながら、自分でできることを行っている。自己の力を身につけ、施設という新しい環境での生活を構築しながらも満足感を抱きながら生活し、生じた力が生きる力になっていることが明らかになった。 共著者：吉尾千世子、横島啓子、富田真佐子
6. 手術室における看護業務疲労の実態－二交代制勤務導入前後の比較－	共	2010年04月	第40回日本看護学会論文集 看護管理	回復期リハビリテーション病棟において、FIMの勉強会を行うことで同一の評価視点でFIM評価を行うことができ、その継続性により評価内容の理解に相違があるかを調査した。その結果、勉強会後に継続的にFIM評価を行うことは、患者のADL向上の実感や看護計画への活用の必要性、ADL不足への具体的支援方法の理解につながっていた。 共著者：横島啓子、飯室淳子、甲斐順子、寺島文、高良美佳
7. 老年看護学療養病院実習における学生到達度および臨床実習指導者の指導内容の評価－2年目の学生指導方法の取り組みによる評価－	共	2010年03月	東海大学医療技術短期大学総合看護研究施設論文集 第19号	手術室看護師の二交代制勤務導入前後の手術業務疲労と職業性ストレスの比較を行い、疲労を感じる業務は外回り看護業務時の「手術が安全にスムーズに進行している時」が最も多く、二交代制勤務導入前後では、「患者を受け入れる時」「患者の不安・恐怖の軽減」に有意差がみられた。手術件数の増加や手術室看護の経験が少ない看護振増加など職場環境の変化が影響しているため、マンパワーの確保と教育の機会の確保、職場の交流が得られる機会の確保などが課題として明確になった。 共著者：横島啓子、飯室淳子、後藤雪絵
8. 老年看護学療養病院実習における指導者の自己評価－ECTBによる評価、初年度と2年目の比較－	共	2010年02月	第40回日本看護学会論文集 看護教育	療養病院実習初年度の課題を基に2年目の指導に取り組んだ介入前後比較から、学生が多様な人生背景を持つ高齢者の対象理解に時間がかかりやすいことを念頭に、受け持ち患者説明時に入院目的や療養経過の情報など提供の方法を工夫したこと、活用可能な社会資源を具体的に取り入れること、学生が受け持ち患者の退院後の生活支援のあり方について具体的にイメージできるような働きかけなどにより、学生の行動目標別の評価および実習指導者の指導評価が有意に上昇した。 共著者：飯室淳子、横島啓子、岡田さとみ、柏木真里子
9. 経験年数別手術室看護師の職業性ストレスおよび業務疲労の関連について－二交代制勤務導入前の業務実態から－	共	2009年04月	第39回日本看護学会論文集 看護管理	老年看護学実習2年目における臨床実習指導者の実習指導内容について、ECTB評価分析を通して初年度指導者6名と2年目の実習指導者6名の実習指導状況の違いを明らかにした。その結果、2年間とも平均得点が高かった上位項目は同項目で、患者との関係性を大切に、学生に対しては受容的な態度で実習指導を行っていた。2年目の意図的な教員の実習指導者への働きかけにより、記録指導のタイミングや指導内容について有意な減少が観察された。 共著者：飯室淳子、横島啓子、岡田さとみ、柏木真里子
10. 老年看護学実習における学生指導のあり方に関する研究－療養病院での学生の实習到達度と臨床実習指導内容における学生・臨床実習指導者評価の比較から－	共	2009年03月	東海大学医療技術短期大学総合看護研究施設論文集 No. 17. 18	A病院手術室看護師12名を対象に、業務内容別の疲労度調査を行うと共に、職業性ストレスの程度について調査した。その結果、疲労度が最も高い業務は「器械・器具の洗浄」であった。手術室経験年数別では、「麻酔覚醒時の介助」と「器械・器具の洗浄」の疲労度が有意に高く、「不安だ」「落ち着かない」の項目でストレス得点が有意に高かった。 共著者：横島啓子、湯浅尚子、飯室淳子
10. 老年看護学実習における学生指導のあり方に関する研究－療養病院での学生の实習到達度と臨床実習指導内容における学生・臨床実習指導者評価の比較から－	共	2009年03月	東海大学医療技術短期大学総合看護研究施設論文集 No. 17. 18	初めて老年看護学実習を受け入れた療養病院での実習初年度における実習行動目標別の学生の到達度および実習指導者の実習指導内容について、学生・実習指導者双方から得られた評価得点結果を比較検討した。その結果、実習行動目標については、全50項目中11項目で有意差が観察された。また、ECTB評価では全43項目中40項目に有意差が観察された。実習指導者は全員が初めて実習指導を行う状況であり、看護場面における指導では学生に積極的に関わることができているが、学生の理解度や思考過程に合わ

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・ 共著書別	発行又は 発表の年月	発行所、発表雑誌等 又は学会等の名称	概要
3 学術論文				
11. 療養病院実習における臨床実習指導者の指導方法に関する研究 ― 初年度1年間の臨床実習指導者の実習指導状況の分析を通して―	共	2009年02月	第39回日本看護学会論文集 看護教育	せて助言することに戸惑っている現状が明らかとなった。 共著者：横島啓子、飯室淳子、岡田さとみ、柏木真里子 カリキュラム変更後の初年度老年看護学療養病院実習における指導者の実習指導状況を検討することを目的に、A療養病院実習指導者6名を対象に年4回の実習終了後ECTB(Effective Clinical Teaching)スケールを用いた5段階評価による調査をおこなった。その結果、ECTB43項目中、平均値が4以上の項目は31項目と7割以上を占めており、指導者が積極的に実習指導に取り組んでいることがわかった。一方、指導者の評価が低かった項目は、「記録指導」関連などであった。 共著者：飯室淳子、横島啓子、岡田さとみ、柏木真里子
12. MIS-THA術後早期における生活実態調査 ― 壮年期女性患者の家事労働と家族の協力に着目して―	共	2007年10月	Hip Joint Vol. 33 P. 34～37	MIS-THA術後の壮年期女性患者の家事労働の実態と家族の協力状況を明らかにすることを目的に、自記式質問紙による調査を行った。その結果、炊事・掃除に対する患者の負担は大きく、時間がかかる作業である為、家事労働の中でも敬遠されやすく、患者から依頼しづらい項目であることが明らかとなり、退院指導時に家族をも含んだ医療者側からの働きかけが必要であることが明らかとなった。 共著者：池田和恵、石井小百合、長谷川裕見子、湯浅尚子、横島啓子
13. 日常生活習慣の変容についての検討―ある職域における9年連続した問診結果の解析から―	共	2007年09月	民族衛生、第73巻 第5号 P. 173～182	A県運輸系企業において、過去9年連続して健康診断を受診した1404名の生活習慣変容について検討した。その結果、喫煙習慣は個人内変動、個人間変動とも小さかった。飲酒習慣は個人間変動が大きく、運動習慣は個人内変動が大きかった。食習慣では個人内・個人間とも「甘い飲み物」「洋菓子」「スナック菓子」の摂取を控えようとする変化が認められた。 共著者：神津祐子、照屋浩司、太田ひろみ、島田直樹、櫻井裕、高安雅嗣、横島啓子、中村功、山下真紀
14. A県下における訪問看護師のスタンダードプリコーションの認知度と手指衛生の実態	共	2007年09月	東海大学医療技術短期大学総合看護研究施設論文集、第16号 P. 17～28	A県下訪問看護ステーション300施設に勤務する管理者及びスタッフ看護師600名を対象に、スタンダードプリコーションの認知度と実際行われる手指衛生の方法を調査した。その結果、管理者の方がスタッフ看護師よりも有意に認知度が高く、手指衛生の実施状況では、両者とも「石鹸で洗う」が最も実施者が多く、「擦式消毒剤」を用いているのはアンケート回答者の半数以下であり、CDCの手指衛生ガイドラインについての知識を習得させる機会が必要であることが示唆された。 共著者：横島啓子、相場百合、森美里、熊谷智子
15. 訪問看護ステーションにおける静脈注射実施状況からみた課題	共	2006年08月	東海大学医療技術短期大学総合看護研究施設論文集、第15号、P. 33～42	在宅で安全に静脈注射を実施する為の課題を明確にする目的で、A県下300施設の訪問看護ステーションを対象に調査を実施した。その結果、訪問看護師は薬剤投与や薬理作用については理解できているが、実施範囲のレベルについては理解が不十分であった。また抜針を家族が行っており、医療従事者との連携や継続的な教育の必要性などが明らかになった。 共著者：横島啓子、小川景子
16. 「医療保険療養病床」と「介護療養型医療施設」における看護業務実態（第2報）―全国調査の結果から―	共	2005年07月	東海大学医療技術短期大学総合看護研究施設論文集、第14号 P. 31～44	療養病床及び介護療養型医療施設215施設に対して質問紙調査を実施した（回収率42.3%）結果、入院患者に関しては両施設共に要介護4・5の重度要介護者が多く、介護療養型医療施設では認知症高齢者の占める割合が高かった。終末期ケアの受け入れでは介護職員の教育について行っているのは介護療養型医療施設のほうが有意に高かった。また介護療養型医療施設の看護師の役割は看護師独自の業務と介護職員と共通に行う業務のどちらも必要とされていた。 共著者：横島啓子、中村真理子、熊谷智子、飛田美穂
17. 「医療保険療養病床」と「介護療養型医療施設」における看護業務実態―施設機能と看護業務の関係―	共	2004年07月	東海大学医療技術短期大学総合看護研究施設論文集、第13号 P. 44～P. 54	医療保険適用療養病床と介護療養型医療施設の施設機能の違いによる看護業務の相違点を明確にすることを目的に神奈川県下10病棟を対象にアンケート調査を行った。その結果、医療型は自立または未要介護認定者が59.8%と多く、介護療養型よりも複雑な医療処置業務を行っており、介護職も「吸引・吸入」「軟膏塗布」などの医療処置を一部担っていた。また、双方共、ケアの質向上のために積極的に教育研修が行われていた。 共著者：横島啓子、阿部ケエ子、中村真理子、熊谷智子、飛田美穂

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・ 共著書別	発行又は 発表の年月	発行所、発表雑誌等 又は学会等の名称	概要
3 学術論文				
18. ユニットケアにおける痴呆性高齢者ケアの効果に関する研究～スタッフの関わりと痴呆性高齢者の日常生活機能変化の分析から～	単	2004年03月	東海大学短期大学紀要第37号 P. 49～P. 58	ユニットケアにおいてスタッフの関わりが痴呆性高齢者の日常生活機能にどのような影響を及ぼすのか、スタッフの対応と痴呆性高齢者の反応の分析から考察した結果、個人のペースを尊重すること、手続き記憶の活用、馴染みの環境や役割を意図的に提供すること、介護技術・コミュニケーション技術の効果によって痴呆性高齢者の日常生活機能の向上が図られていた。
19. 老人看護実習後の高齢者イメージ－老人イメージマップの連想言語から－	共	2003年06月	東海大学医療技術短期大学総合看護研究施設年報、第12号 P. 18～P. 29	老年看護学実習後の学生72名の老人イメージマップテスト法により抽出された連想言語分析をした結果、学生の高齢者のイメージは「人」「身体機能低下」「存在イメージ」「自己確立の安定」に焦点が当てられ学習体験とのつながりが示唆された。 共著者：中村真理子、服部紀子、横島啓子
その他				
1. 学会ゲストスピーカー				
2. 学会発表				
1. Moodleの「フォーラム」機能を利用した多職種による高齢介護者に対する支援の試み	共	2016年12月	第36回日本看護科学学会学術集会	「Moodle」の「フォーラム」モジュールにネットワーク構成員となる職種メンバー（医師、看護師、訪問看護師、理学療法士、作業療法士、介護支援専門員）を登録し、Online上の専門職チームのやり取りの結果を直接介護者（65歳以上の高齢者夫婦世帯11名）へフィードバックした。介入前後に質問紙調査を実施した結果、J-ZBIでは介入後は有意に得点が低く介護負担が軽減していた。SF-36ではMH（心の健康）が介入後有意に得点が高く、介入による心の安定が図れていた。簡易生活リズムでは有意差はみられなかった。Moodleの特性としてそれぞれ異なる場所や時間で活動している専門職を繋げて介護者のニーズに的確に応えることができ、直接サービスの提供は行えないが、専門職からタイムリーなアドバイスを受けること、自分の感情を第三者に伝えることが心理的負担の軽減に繋がることが示唆された。 共同発表者：横島啓子、吉野由美子、杉浦圭子、藤尾祐子、黒川佳子
2. テキストマイニング分析による高齢者夫婦世帯の居宅介護サービスに関する満足感と介護困難の実態	共	2016年08月	日本看護研究学会第42回学術集会	65歳以上の夫婦世帯のみの高齢介護者11名に対して、現在受けている介護サービスの状況と介護生活における困りごとについてインタビューを実施し、テキストマイニング分析を行った。介護サービスの内容は概ね満足で、高齢介護者にとって介護支援専門員が生活支援者の中心的存在であった。一方で介護支援専門員による情報量には差があり、サービスの内容や頻度が介護者のニーズに合致しておらず、身近だからこそ不満を伝えられない現状も明らかになった。介護サービスについて、介護者自身が情報を収集し、現在のサービスを評価することは困難である。今後は多方面、多職種専門職によるネットワークシステムが必要であると考えられた。 共同発表者：横島啓子、吉野由美子、杉浦圭子
3. 大腿骨近位部骨折の高齢者のせん妄・急性混乱の発症時期と要因の関連性	共	2016年07月	第47回日本看護学会－急性期看護－学術集会	大腿骨近位部骨折のため入院・治療を受けた65歳以上の患者49名に対して、【背景・準備因子】【身体・治療因子】【患者因子】【周辺因子】の4つの因子に含まれる項目について診療録・看護記録等からデータを収集した。せん妄・急性混乱の発症率は36.7%で、手術前の発症と術後の発症があり、術後のせん妄発症群では平均年齢が高い傾向にあった。せん妄発症要因のうち有意差を認められたのは【患者因子】のひとつである睡眠障害であり、せん妄発症群では睡眠障害のある患者の割合が有意に高く（ $p < .05$ ）、半数が入院前から眠剤等を使用していた。睡眠障害はせん妄発症に関与しており、睡眠のアセスメントやケアの見直し、標準化が必要である。 共同発表者：梅澤路絵、横島啓子、久山かおる
4. 同居近親者死別による独居高齢者の生活と健康	共	2016年07月	日本老年看護学会 第21回学術集会	藤尾祐子、小川典子、横島啓子、米澤純子、福嶋龍子、美ノ谷新子 65歳以上の同居近親者の死別により独居となった高齢者24名に対し、死別6ヶ月後と1年後に簡易生活リズム質問票およびSF-8による調査を行った。その結果、死後6ヶ月後より1年が経過した頃から生活や健康状態の低下を認め、死別後のセレモニー等の煩雑さから喪失感が強まる時期へと移行するものと考えられた。死別後の早い時期に、独居となった高齢者自身が日常役割機能等の力を蓄える必要性が示唆された。 共同発表者：藤尾祐子、小川典子、横島啓子、米澤純子、福嶋龍子、美ノ谷新子

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・ 共著書別	発行又は 発表の年月	発行所、発表雑誌等 又は学会等の名称	概要
2. 学会発表				
5. 介護老人福祉施設における看護・介護職の看取りケアの実態調査 介護職による安全な医療行為実施への課題	共	2016年07月	日本老年看護学会 第21回学術集会	看取りケアの達成状況において看護職と介護職間で有意差があったケア内容は医学知識による判断や技術を要するものであった。現在の介護現場では身体介護と生活援助に加えて医療行為の提供も含まれている。管理者が施設内で職員間の連携が図れるように定期的なカンファレンスを行うなど、情報交換しやすい体制を整備することや教育体制を整えていくことの必要性が示唆された。 共同発表者：黒川佳子、横島啓子、長沼淳、松浦美織
6. 通所介護利用者に対するアンケート自由記述の回答傾向と支援方法の検討	共	2016年07月	日本老年看護学会 第21回学術集会	通所介護者に対する支援方法を検討する目的で、通所介護者897人にサービス満足度等の調査を行った結果、自由記述へ回答がある者のほうがない者よりサービス満足度が高かった。サービス満足度が低いものは自由記述を行わないことやサービスに不満と感じていても言葉に表現できていない利用者が多くいることが明らかになった。そのため積極的な利用者へのヒヤリングなど潜在的ニーズの把握が必要である。 共同発表者：杉浦圭子、横島啓子、林知里
7. 介護老人福祉施設における看護・介護職員の看取りケアの実態～看取り経験の有無別ケアの実施と研修ニーズ～	共	2015年12月	第35回日本看護科学学会学術集会	全国の介護老人福祉施設200施設の看護師・介護職を対象に看取りケアに関する質問紙調査を行い、看取り経験の有無別での分析を行った。その結果、看取り介護の単独実施は、看取りのケアの経験があるほうが有意に一人で実施できると回答しており、施設内で看取りを実施するための必要項目は、「家族を理解すること」「家族の希望を聞くこと」「家族との連携」「安心して過ごせることができる」などであった。研修ニーズでは、看取り経験がある群は、「口腔ケア」「痛みの緩和」「メンタルケア」「連携のあり方」など具体的な内容であった。一方経験の無い群は、「終末期ケア」「技術」「施設での取り組み」「基本的な関わり方」など、緩和ケア全般についてであった。 共同発表者：横島啓子、長沼淳、黒川佳子
8. 高齢者夫婦世帯患者への在宅支援～退院カンファレンス内容の分析から～	共	2015年10月	第46回日本看護学会 在宅看護	3事例の退院カンファレンスの内容分析から、高齢者夫婦世帯で在宅へ復帰する際に、どのような支援が必要なのか検討を行った。退院カンファレンスを通して共通している項目は、患者の状態把握と介護負担への援助であった。状態把握については、退院カンファレンスに参加する職種間の情報共有だけではなく、夫や妻にも現在の状況を正確に把握させ、退院後の生活や介護のイメージを明確にさせることにつながっており、状態把握と介護方法の習得は、介護への意欲や自信につながっていた。一方で、患者の状態が不安定であったり、介護者が回復経過について不満を持っていることもあり、退院後は訪問看護の介入によって、患者の状態管理だけではなく、高齢介護者の不安を十分に聞き取り、対処することが在宅で安心して介護を行うことが示唆された。 共同発表者：横島啓子 黒川佳子 藤尾祐子 吉野由美子 前野博
9. 介護老人福祉施設における看護・介護職員の看取りケアの実態～経験と達成状況に焦点をあてて～	共	2015年09月	第46回日本看護学会 慢性看護	全国200カ所の介護老人福祉施設に勤務する看護職および介護職1000名に対して、H18年厚生労働省看取り介護ガイドラインの看取り介護の8領域33項目について質問紙調査を実施した。介護職は看護職と比較し、清潔等日常生活援助の項目において達成状況の割合が高かった。また、両職種ともに死後への対応の経験・達成状況が低い割合であった。死後への対応の経験・達成状況の低さは利用者の死亡退後の家族ケアの難しさを現している。今後「死後への対応」を実施するためには、技術だけではなく、グリーフケアについての研修会の開催、職員間の討議の場の確保やグリーフケアを実施できるような勤務体制の構築の必要性が示唆された。 共同発表者：黒川佳子、横島啓子、長沼淳
10. 介護老人福祉施設における看護・介護職員の看取りケアの実態（第2報）～看取りケア研修のニーズと内容に焦点をあてて～	共	2015年09月	第46回日本看護学会 慢性看護	全国200カ所の老人福祉施設に勤務する看護職及び介護職に対して看取りケア研修について自由記述にて回答を得た。データはText Mining Studio ver5.1を用いて分析を行った。その結果、両職種とも施設における看取りケアでは、家族の適切な理解に基づく多職種が連携したケアが必要との認識があった。看取りケアを施設で行うために受けた研修としては、看護職は家族対応や医療的な研修など具体的な課題を示す傾向が強いのにに対し、介護職では一般論としての研修の必要性を訴える傾向が強く、今後は看取りケアの概論的な内容と家族対応、医療的ケアを含む看取り技術の研修が必要である。 共同発表者：横島啓子、黒川佳子、長沼淳

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・ 共著書別	発行又は 発表の年月	発行所、発表雑誌等 又は学会等の名称	概要
2. 学会発表				
11. Home Assistance for Aged Patients Couples in Terminal Stage	共	2015年08月	12th International Family Nursing Conference 2015	ターミナル期にある高齢夫婦患者の終末までの在宅サービスの実態についてインタビューを行った結果、退院カンファレンスでは、患者の妻は在宅に必要な介護技術に関して積極的に取り組んでおり、自分で介護ができると捉えていた。さらに、ターミナル期にある患者を在宅で介護する恐怖等の訴えがないことから、退院後に介護負担が増強することの予測ができていないことが考えられた。そのため、訪問看護師を中心として介護支援専門員と連携を図りながら、患者の生命を守るための退院直後に必要なサービスと継続して行うサービスの2段階の検討がなされていた。しかし、実際に退院後の生活では、夜間の緊急時の対応について、妻だけではなく、地域の病院に事前に調整を行うなど、具体的な支援についての課題が明確になった。 共同発表：Keiko Yokojima, Yoshiko Kurokawa, Yuuko Fujio, Yumiko Yoshino, Hiroshi Maeno, Keiko Sugiu ra
12. 同居近親者死別による独居高齢者の生活と健康—死別6ヶ月後のアンケート調査から—	共	2015年08月	日本地域看護学会第18回学術集会	65歳以上で同居近親者の死別により独居となった高齢者24名に対して、死別6ヶ月後の日常生活自立度を判定し、簡易生活リズム質問票およびSF-8を用いて調査を行った。その結果、日常生活自立度は23名がランクJで1名がランクAであった。日常生活も自立しており、生活リズム同調得点は独居高齢者の先行文献とほぼ同等の得点でSF-8は包括的尺度ながらすべてに高い傾向が認められ、死別6ヶ月後の独居高齢者の生活と健康は維持されていた。 共同発表：美ノ谷新子、藤尾祐子、小川典子、横島啓子、福島龍子、米澤純子
13. オフラインHDFからオンラインHDFに変更した高齢透析患者の状態と看護	共	2015年06月	第60回日本透析学会学術集会	オフラインHDFからオンラインHDFに変更した入院中の透析患者13名（原疾患DM/非DM=8/5、平均年齢73.8歳）の状態を比較検討した結果、オンラインHDFでは入室時の血圧および入退室時の脈拍はオフラインHDFよりも有意に安定している（ $p < 0.05$ ）結果が得られた。透析中の血圧低下に対して入退室時の血圧が安定していることから、オンラインHDFの方が早期の処置ができていた。これはオンラインHDFでは、オフラインHDFのように置換液を定期的に追加するという労力が省かれるため、患者の状態観察を頻回に行うことができ、状態安定の看護が実施できた結果である。さらに血圧や脈拍の安定が得られたことから、高齢透析患者においてもオンラインHDFは有用であると考えられる。 共同発表：横島啓子 柄本美芽 飛田美穂 倉田康久
14. ターミナル期にある高齢者夫婦世帯患者への在宅支援～退院カンファレンス内容の分析～	共	2014年10月	第45回日本看護学会 在宅看護	退院カンファレンス内容から高齢者夫婦世帯でターミナル期にある患者が在宅へ復帰する際に、どのような支援が効果的なのか分析を行った。その結果21のサブカテゴリーからの7つのカテゴリーが存在した。それらの結果から、高齢者夫婦世帯における在宅ターミナル患者の介護では、訪問看護師の観察・医療処置管理・地域の医師との連携が不可欠であり、病院と地域の専門職がカンファレンスで情報を共有することにより、在宅での支援のための迅速かつ適切な連携を図ることができ、妻の想いを汲み取り、妻が行う介護のサポートに回ることで、妻の自尊心の向上につながる事が明らかとなった。 共同発表：横島啓子、黒川佳子、藤尾祐子、吉野由美子、前野博
15. 透析看護に関する研修効果	共	2014年09月	第45回日本看護学会 看護教育	透析室看護師および病棟看護師の両者を対象に透析看護に関する研修を行い、研修効果を明らかにすることを目的に質問紙調査を行った。その結果、透析治療に関する内容全29項目は研修前よりも研修後の平均得点が有意に高く、患者の状態観察等に関しては20項目中5項目のみが研修前よりも研修後の平均得点が有意に高かった。病棟看護師と透析看護師の比較では、透析看護師のほうが病棟看護師よりも平均点が上昇しており、研修によって実際に行っている看護と結びつけて考えることができ、より理解が深まったものと考えられる。 共同発表：横島啓子、掛谷和美、飛田美穂、倉田康久
16. Establishment of a collaborative care model involving in-home and residential services to promote the undernutrition management of elderly individuals needing long-term care to prevent the deterioration of health - Awareness of undernutrit	共	2014年07月	2014 Asian Society of Human Services	在宅および施設で生活する要介護高齢者の栄養状態の実態調査と、在宅および施設の介護保険サービス従事者に、要介護高齢者の「低栄養改善」に対する意識調査を実施することで、ケアレベルでの「低栄養改善」に向けた在宅および施設の連携モデルを構築するため、第一次調査として、介護保険サービス従事者に対して、質問紙を用いた意識調査を実施した。その結果、「低栄養改善」のために把握してお

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・ 共著書別	発行又は 発表の年月	発行所、発表雑誌等 又は学会等の名称	概要
2. 学会発表				
ion management among care service staff -				くべき情報について、全体的には概ね知っている状況であったが、栄養状態の指標となるBMI、血清アルブミンについてはほとんど理解されていなかった。さらに、施設サービス従事者は食形態や食事摂取量等のケアレベルでの状態把握はしているが、全体像を捉えていないという実態も明らかであった。 共同発表：Yuko FUJIO, Noriko OGAWA, Keiko YOKOJIMA
17. 医療療養型病床における病棟看護師教育について～透析室看護研修の結果からの考察～	共	2014年06月	第59回日本透析医学学会 学術集会	透析患者の看護に必要な病棟看護師の教育を明らかにする目的で、透析室での研修を終了した看護師に各研修項目についてアンケート調査及び半構造的面接法を行った。研修項目一日の流れの把握やBP測定、PEG・MT内服注入は理解できていたが、返血理解、返血手技は達成度が低かった。透析に関する知識は、回答にばらつきがみられており、病棟看護師として透析の手技だけではなく、透析に関連した基礎知識の習得と透析患者の全身管理に必要な研修内容を実施していく必要があることが示唆された。 共同発表：横島啓子、掛谷和美、東海林由加里、飛田美徳、倉田康久
18. 高齢者の生活背景と手続き記憶との関係	共	2013年12月	第33回日本看護科学学会	2×5順序手続き課題法を用いて、高齢者の日常生活の背景と手続き記憶との関連を検討した結果、心肺運動を行っている場合はボタン押しの動作が速いが、誤数や連続達成試行数は変化がなかった。生活面では初回と2日目の遂行時間の差が手作業を含む趣味の有無と有意に相関していた。 共同発表：横島啓子、藤尾祐子、黒川佳子、近藤ふさえ、吉尾千世子
19. 固定障害を持つ終末期透析患者の看護～最期までその人らしさを引き出す援助～	共	2013年10月	第44回日本看護学会 成人看護Ⅱ	低糖尿病性脳症及び固定障害と診断された終末期患者のケアに携わった看護師にグループインタビューを行った結果、終末期患者への援助は、看護師のその人らしい最期を送らせてあげたいという思い、患者の表情・反応を的確に捉えチームで共有することで、患者のニーズに合わせた援助につながったことが明らかとなった。 共同発表：横島啓子、藤田美代子、倉田康久
20. 固定障害へのアプローチ	共	2013年06月	第58回日本透析医学学会 学術集会	入院時意識混濁状態であった固定障害患者に対し、看護師の訪室毎の声かけや、音楽を毎日同じ時間帯に流し一緒に歌うこと、食事場面の共有などの繰り返し刺激は、患者の生活リズムを確立することにつながり、歌うことは咀嚼・嚥下訓練になり、最終的にPEGによる経管栄養と経口摂取が開始されるに至った。このことは、患者のニーズを充足し自尊感情の向上に繋がったと考えられる。 共同発表者：横島啓子、藤田美代子、倉田康久
21. 同居近親者死別による独居高齢者の生活と健康の変化—一次調査結果より—	共	2013年06月	日本老年看護学会第18 回学術集会	寺院関係者は、死別後の遺族に早期に接点を持っていた。また遺族との話題は直面している納骨や墓地のほか、遺族自身の生活の変化や健康に関する内容が多く、寺院関係者は遺族の精神的変化や健康上の変化を捉えていた。この結果より寺院関係者が死別後独居高齢者の身近なセーフキーパーとしての存在である可能性が示唆された。 共同発表者：藤尾祐子、横島啓子、小川典子、米澤純子、福嶋龍子、美ノ谷新子
22. Affection of emotional intelligence to perceptions of ethical climate and physical restraint use in acute care settings in Japan	共	2013年03月	10th AAPINA Annual Conference,	日本の急性期医療施設で働く看護師374名を対象に、情動知能スコア、身体抑制の必要性スコア、帰属する組織の倫理的職場風土スコアについて質問紙を配布し、郵送にて回収した。結果は情動知能の高い群は中間群、低い群に比べ、身体抑制の必要性および倫理的職場風土のほぼすべてのカテゴリについて高いスコアを示した。唯一、他者への迷惑行為を防止するための抑制の必要性に関しては情動知能の高い群が中間群よりも低いスコアを示した。情動知能の高さは個人の倫理的意識決定に影響を与える予測因子であることが示唆された。 共同発表者：Kyoko SHIDA, Keiko YOKOJIMA
23. 要介護高齢者の生きる力の構成要素—介護老人福祉施設の利用者を対象にして—	共	2012年07月	日本老年看護学会 第17 回学術集会	福祉施設に入所する要介護高齢者が、どのような気持ちで、何に支えられて生活をしているのか調査をした結果、要介護高齢者は、施設入所であっても生活のすべてを他者に依存するのではなく、自分でできることをすることによって、自分に誇りや自信をもち、自己の力を身につけ、新しい環境での生活を構築していく力が、生きる力になっていることが明らかになった。 共同発表者：横島啓子、吉尾千世子、富田真佐子
24. 総合実習における夜間体験実習の効果—卒業後初めて夜間勤務に及ぼす影響—	共	2010年12月	第30回日本看護科学学会	夜間体験実習の経験への回答及び実習目標と初めての夜間体験実習への役立ちの関連をみたところ、「夜勤業務の実際」「夜間の患者の安全管理」「夜間

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・ 共著書別	発行又は 発表の年月	発行所、発表雑誌等 又は学会等の名称	概要
2. 学会発表				
25. 回復期リハビリテーション病棟におけるFIM学習会の効果について～事例患者を用いたFIMテストの結果から～	共	2010年12月	第30回日本看護科学学会	患者の状態」に有意な関連を認めた。 共同発表者：飯室淳子、横島啓子、土江順子 FIM勉強会の効果を事例を用いたテストにより検証した結果、コミュニケーションや社会的認知の項目全5項目中4項目が誤差の大きい項目であったが、勉強会により評価基準が明確になった。しかし、移乗に関しては勉強会後に評価得点の誤差が大きく、一連の複数の動作を評価する場合は、評価視点や事例提示に課題があることが示唆された。 共同発表者：横島啓子、飯室淳子
26. 夜間体験実習の教育内容の検討ー初めて夜間勤務における新人看護職員の不安内容との関連ー	共	2010年10月	第41回日本看護学会看護管理	夜間体験実習における経験が、卒後初めての夜間勤務にどのように影響していたかを調査した結果、夜間実習経験の有無にかかわらず、新人看護職員の9割以上が初めての夜間勤務に不安があり、急変時の対応や業務、看護師の責任についてが、不安の上位であった。 共同発表者：飯室淳子、横島啓子、土江順子、成田美智江
27. 回復期リハビリテーション病棟におけるFIM評価表の活用ー看護計画へFIM評価結果を反映させる為の取り組みー	共	2010年08月	第41回日本看護学会成人看護Ⅱ	FIMの勉強会を実施し、勉強会の評価を事例患者を用いて客観的に行い、看護計画に反映させることができた。これは勉強会前にテストを行い、対象者のレディネスに合った勉強会を実施したことが有効であった。 共同発表者：甲斐順子、寺嶋文、高良美佳、横島啓子、飯室淳子
28. 初めて実習指導を行った臨床実習指導者の指導状況に関する研究	共	2009年11月	第29回日本看護科学学会	2007年度から2008年度において老年看護学実習で初めて臨床実習を担当する指導者に対して、初めて実習指導を行う指導者が苦手とする指導項目を明らかにし、指導者抱く困難さを緩和するための方略を導き出す目的で、ECTB評価結果から分析を行った。その結果、2007年度、2008年度ともに評価得点の低かった項目は、実習記録に関する項目および文献活用や学生の更なる向上への対応に関する項目であり、これらの項目は、初めて実習指導に関わる指導者にとって苦手とする内容であることが示唆された。 共同発表者：飯室淳子、横島啓子
29. 手術室における看護業務疲労の実態ー二交替制勤務導入前後の比較ー	共	2009年10月	第40回日本看護学会看護管理	A病院手術室における二交替制勤務導入前後の看護業務疲労について、手術室看護師19名を対象に調査を行った。その結果、二交替制導入前の年間手術件数は5,585件であったが、二交替制勤務導入後は6,052件に増加しており、「患者を受け入れる時」「患者の不安・恐怖が軽減できるような援助する時」「手術が安全にスムーズに進行している時」「術中無菌操作を維持し、安全に器械出しをしている時」の項目に導入前より導入後のほうが、疲労度が有意に高くなっていた。外回り看護業務は複数の手術室を兼務し、患者の受け入れ業務を事故なく安全に行うこと、さらに不安と緊張を抱えて入室される患者に対して、不安の軽減に十分関われない状況に疲労を感じていることが明らかとなった。 共同発表者：湯浅尚子、横島啓子、飯室淳子、後藤雪絵
30. 老年看護学療養病院実習における学生指導方法に関する研究ー初年度と2年目の学生到達度評価の比較ー	共	2009年09月	第40回日本看護学会老年看護	初年度老年看護学実習担当臨床実習指導者と2年目の臨床実習指導者に対して、各指導者が担当した学生の実習達成状況の評価を比較した。その結果、初年度は平均得点が4.0以上の項目は全50項目中10項目であったが、2年目は18項目と増えており、全項目50項目中44項目で平均得点が上昇していた。項目毎の比較では、「活用可能な社会資源を具体策に取り入れる」「情報の解釈・分析」について有意差を観察した。 共同発表者：飯室淳子、横島啓子、岡田さとみ、柏木真里子
31. 療養病院における学生指導方法の課題ー臨床実習指導者の初年度指導と2年目の指導状況の分析を通してー	共	2009年08月	第40回日本看護学会看護教育	老年看護学実習初年度と2年目において、臨床実習指導を担当した指導者9名に対して、ECTB評価スケールにて指導内容を評価し、初年度と2年目の指導内容の検討を行った。その結果、初年度は「学生の思考に合わせた実習記録の指導」に苦慮していたが、2年目は教員とともに学生を指導していくことで、有意に評価得点が上昇していた。一方でより良い看護援助を行うための「文献活用」については、初年度よりも2年目のほうが有意に得点の減少がみられた。 共同発表者：横島啓子、飯室淳子、岡田さとみ、柏木真里子
32. ストレス評価法としての唾液アマラーゼ活性測定の意味について（第3報）ーストレス状態別の変化ー	共	2009年05月	第82回産業衛生学会	対象者100名に対して、職業性ストレス簡易調査の回答結果から、「ストレス要因の有無」および「ストレス反応の有無」による4群に群別し、クレベリンテストによる唾液アマラーゼ活性の変化を比較した

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・ 共著書別	発行又は 発表の年月	発行所、発表雑誌等 又は学会等の名称	概要
2. 学会発表				
33. ストレス評価法としての唾液アミラーゼ活性測定の意義について(第2報)	共	2009年05月	第82回産業衛生学会	<p>その結果、ストレス要因がない群はストレス反応有無にかかわらず、クレペリンテストの負荷を受けてから反応の出現は遅いが、その後急速に活性値が上昇しており、ストレッサーに対して鋭敏に反応するのではなく、反応出現は遅発的ではあるが程度は強いことが言えた。一方、ストレス要因がある群では、クレペリンテストの負荷後活性値は上昇しているが、その後の数値の上昇は緩やかで、ストレッサーに対する反応は早い程度は強くないことを示していた。</p> <p>共同発表者：横島啓子、太田ひろみ、眞鍋知子、照屋浩司</p>
34. 老年看護学療養病院実習における学生の到達度について－学生・指導者評価結果からの比較検討－	共	2008年12月	第28回日本看護科学学会学術集会	<p>説明による同意が得られた対象者100名に対して、ホルター心電図検査、職業性ストレス簡易調査票を実施した。唾液アミラーゼ活性を調査票記入の実施前、開始10分後および20分後に測定し、心拍変動の各指標(HF成分、LF/HF、RR間隔)の変化と比較した。その結果、唾液アミラーゼ活性は精神的作業負荷に伴い上昇し、RR間隔の短縮、HF成分の減少と同様の傾向を示した。唾液アミラーゼ活性、HF成分、LF/HF、RR間隔の全ての指標で調査過程における測定時期による有意な変化が認められたが、ストレス様態での群別によって測定時期による変化に差がみられたのは唾液アミラーゼ活性のみであった。</p> <p>共同発表者：照屋浩司、横島啓子、太田ひろみ、眞鍋知子、高安雅嗣、神津祐子</p>
35. 手術室看護師の経験年数と職業性ストレスおよび業務疲労の関連について－二交替制導入前の実態から－	共	2008年10月	第39回日本看護学会 看護管理	<p>二交替制勤務導入前の業務実態についてA病院手術室看護師12名に対して、職業性ストレス簡易調査票および手術看護業務の業務疲労に関する質問紙調査を行った。その結果、職業性ストレスについては看護師の経験による差はみられなかったが、手術室看護経験3年未満の看護師は、「不安だ」「落ち着かない」という精神的ストレスの訴えが、3年以上の看護師より多く回答していた。また、疲労を感じる手術室業務としては、「麻酔覚醒時の介助」が手術室経験年数3年未満のほうが3年以上よりも有意に多かった。</p> <p>共同発表者：湯浅尚子、横島啓子、飯室淳子</p>
36. 療養病院実習における学生指導のあり方に関する研究～臨床実習指導者の実習指導状況の分析を通して～	共	2008年08月	第39回日本看護学会 看護教育	<p>初めて老年看護学実習を担当した臨床実習指導者6名に対し、実習指導を担当した学生別に指導内容をECTBスケールにて評価した結果、指導に力を注げたと評価している項目は、良好な人間関係作りや環境調整であった。指導内容では記録指導のタイミングを図ることが低値であった。実習クール別では積極的な姿勢に有意差が観察された。以上のことから、教員は学生の思考過程を考慮して、指導者とともに指導のタイミングを調整して必要があることが明らかとなった。</p> <p>共同発表者：飯室淳子、横島啓子、岡田さとみ、柏木真里子</p>
37. 療養病院実習における学生指導のあり方に関する研究－学生の実習到達状況の分析から－	共	2008年08月	第18回日本看護学教育学会	<p>2007年度老年看護学実習を行ったA看護短期大学3年生80名に対し、療養病院実習の行動目標別の達成状況を5段階にて自己評価し、学生の実習達成状況の結果から指導課題を考察した。その結果、学生の自己評価が最も高かった項目は「実習を通して自己の成長・課題を述べること」であり、最も達成度が低かった項目は「活用可能な社会資源を具体策に取り入れること」であった。また、実習時期別では、1クール目の学生と領域別の実習を展開してきた4クールの学生間で有意差が観察され、クール毎に指導を行うタイミングを考慮する必要があることが示唆された。</p> <p>共同発表者：横島啓子、飯室淳子</p>
38. 複数回繰り返して測定による血圧値・脈拍数の変動に関する検討	共	2008年06月	第81回産業衛生学会	<p>某企業内の診療所を受診した初診時の年齢が20歳から82歳までの男女860名に対して、一度の診察時に複数回繰り返して血圧値を測定した際の変動および診察回数が増えるに従ってそれらにどのような変化がみられるかについて検討した結果、年代・性別に関わらず、1度の受診時に測定を繰り返すごとに血圧値は低下する傾向が示された。また、複数回の受診によって血圧値は低下することも示された。</p>

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・ 共著書別	発行又は 発表の年月	発行所、発表雑誌等 又は学会等の名称	概要
2. 学会発表				
39. クレペリンテストによる唾液アミラーゼ活性と心拍変動の関連	共	2008年06月	第81回産業衛生学会	共同発表者：照屋浩司、高安雅嗣、島田直樹、櫻井裕、神津祐子、横島啓子、太田ひろみ、眞鍋知子、中村功 看護師52名に対して、クレペリンテストによる精神的作業負荷前後の唾液アミラーゼ活性値の変化と心拍変動解析の変化を比較した結果、クレペリンテストの負荷により唾液アミラーゼ活性の上昇が観察され、クレペリンテストの時間が長くなるほど数値が高くなる傾向を示した。心拍変動解析結果では、HF成分の変化はクレペリンテスト開始前の5分間の安静後に高値を示し、10分後には最も低値となり、その後高くなる傾向であった。LH/HFの変化は、概ねHF成分の変化と逆の位相を示したが、クレペリンテストによる負荷の後半ではHF成分と同様に高値を示した。
40. 療養病院実習における指導内容に関する研究 -ECTB評価スケールを用いた指導者と学生の評価結果比較から-	共	2008年	第28回日本看護科学学会学術集会	共同発表者：横島啓子、太田ひろみ、眞鍋知子、高安雅嗣、神津祐子、照屋浩司 初めて老年看護学実習を担当した臨床実習指導者6名と実習を実施した学生80名に対して、指導者の指導内容をECTBスケールにて評価し比較検討した。その結果、全43項目中41項目について有意差がみられた。学生は全項目で平均値が4.0以上であったが、指導者の評価の平均得点が3.5以下の項目は、「記録助言へのタイミング」「記録内容への助言」など理論的な指導項目についてであった。
41. MIS-THA術後在院日数短縮における患者満足度の実態	共	2007年10月	日本看護学会 看護管理	共同発表者：横島啓子、飯室淳子 MIS-THAにて、在院日数が14日から4日に短縮したことによる、患者サービス満足度についての実態調査を行い、患者は、治療や看護についての満足度は高いが、受け入れ先の病院との調整や会計の煩わしさなどに不満があり、各部門が連携を図りながら総合的な関わりにより、患者の不安の解消やサービスの質向上につなげる必要があることが示唆された。
42. A県下訪問看護ステーションにおける静脈注射実施状況からみた課題	共	2006年12月	日本看護科学学会 第26回学術集会	共同発表者：湯浅尚子、横島啓子 A県下訪問看護ステーション300施設に対し質問紙にて静脈注射実施状況について回答を依頼し、62施設から回答を得た。看護職の91%は1人で静脈注射を実施できると回答しているが、実技教育の教育希望が多く、同じ法人内のステーションであっても、医師や薬剤師との連携が不足していた。また、抜針は家族が行う場合が72.6%を占めており、患者や家族の安全を保障する体制作りの必要性が明らかになった。
43. 日常生活習慣の変容についての検討	共	2006年11月	第71回日本民族衛生学会	共同発表者：横島啓子、小川景子 A県運輸系企業において、過去9年連続して健康診断を受診した1404名の生活習慣変容について検討した。その結果、喫煙習慣は個人内変動、個人間変動とも小さかった。飲酒習慣は個人間変動が大きく、運動習慣は個人内変動が大きかった。食習慣では個人内・個人間とも「甘い飲み物」「洋菓子」「スナック菓子」の摂取を控えようとする変化が認められた。
44. MIS-THA退院早期における生活実態調査 -壮年期女性患者の家事労働と家族の協力に着目して-	共	2006年10月	第33回日本股関節学会	共同発表者：神津祐子、照屋浩司、太田ひろみ、島田直樹、櫻井裕、高安雅嗣、横島啓子、中村功、山下真紀 MIS-THAを施行した壮年期女性36名に対し、質問紙法にて、退院早期の家事労働の実態調査を行った結果、家族は屋外の作業に関しては積極的に協力しているが、屋内作業に関する協力が少なく、対象者は家事労働を負担に感じている。そのため、入院中に家族を含め状況の理解と協力のあり方について指導を行う必要性が示唆された。
45. 介護保険施設における職員研修の実施状況と研修ニーズ；C県下のアンケート調査より	共	2004年11月	第9回 日本老年看護学会学術集会	共同発表者：池田和恵、横島啓子、長谷川裕見子、石井小百合、湯浅尚子 C県下の介護保険施設での職員への教育の実態と職員の研修ニーズについて421施設を対象に調査し、今後の介護保険施設における職員教育のあり方を検討した。回収数は141施設で、ほとんどの施設で何らかの職員研修が実施されていたが、実施した研修が実践の質の向上につながっていくには、研修効果を評価し、職員の希望を活かした研修プログラムを企画・運営する必要性が考えられた。
46. 施設における介護主任の役割に関する一考察～リーダーシップが発揮できる介護主任を育てるために～	共	2002年11月	第3回日本痴呆ケア学会	共同発表者：根本敬子、横島啓子、太田節子 高齢者施設における介護主任の役割を明確にするために事例検討を行った。その結果、介護主任が発揮した役割は、1) 自分の介護観を押しつけるのではなく、スタッフの思いを知り、チームの中でスタッフが共通理解できる場を提供すること、2) 入居者対

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
2. 学会発表				
47. 胃ろう造設した痴呆性高齢者への経口摂取の進め方の一考察	共	2002年11月	第3回日本痴呆ケア学会	<p>してのケアの質を保障するためにはどうすべきかという教育的関わり、3)介護主任自身が個別ケアの提供を実践できるということが挙げられた。</p> <p>共同発表者：湯浅尚子、横島啓子</p> <p>5名の胃瘻造設した痴呆性高齢者に対し、6段階の経口摂取までのプログラムを立案し実施した。経口摂取開始の基準や摂食訓練の内容や速度も個々により異なるが、全員が経口摂取可能となった。また、経口摂取の進行とともに、どの入居者もリビングで過ごす時間やアクティビティに参加する時間が増え、笑顔や発語が増えるなどプラスの反応がみられるようになった。</p> <p>共同発表者：広田千鶴、横島啓子、湯浅尚子</p>
48. 私の生活は誰のもの～その人の空間づくりで、その人らしさ復活！～	共	2002年05月	全国痴呆性高齢者グループホーム大会	<p>脳梗塞による左半身麻痺のためADLは全面介助を必要とする活動性の低い居住者に対し、その人らしさを大切にした生活は何かを考え援助した結果、グループホーム内で生活リズムをA氏のペースに合わせて一緒に考え作成したこと、A氏の趣味である園芸をリビングのテーブルで行えるように調整したことなど、バックグラウンドの情報をA氏から得ることで、A氏の世界をスタッフが知り、それを生活の中に一緒に組み込むことが、その人らしい生活を再構築するために必要であることを再認識した。</p> <p>共同発表者：原田直子、宇賀神崇、横島啓子</p>
49. 胃瘻造設を余儀なくされた痴呆性高齢者の食事摂取へのアプローチ～グループホームケアを活かし、経管栄養から経口摂取へ～	共	1995年	第2回日本痴呆ケア学会	<p>病院入院中に胃瘻造設を余儀なくされた脳血管性認知症の入所者に対し、居住者とスタッフとの楽しい雰囲気の中での食事風景に同席させたことや居住者・スタッフとの馴染みの関係が、K氏に安心感を与えた。K氏のペースに合わせた援助方法がK氏に混乱をもたらすことなく、また、スタッフ間でも観察状況を共有し援助を拡大することにより、K氏の食に対する欲求や味覚の表現につながり、経口摂取に移行することができた。</p> <p>共同発表者：湯浅尚子、横島啓子</p>
50. 整形外科疾患をもつ患者のニーズに応じた排泄介助を行うための一考察－排泄介助に対する認識と対処行動－	共	1994年10月	第25回日本看護学会 成人看護 I	<p>床上排泄およびポータブルトイレでの排泄を経験したことのある整形外科病棟入院中の患者42名に対し、質問紙により排泄に関する認識と対処行動を調査した。その結果、患者は羞恥心・遠慮などがあり、水分食事制限や家族の面会時に家族に介助を依頼する、訪室する看護者によって依頼するかどうかを決める等の行動をとっていた。そのため、看護者が患者のニーズを理解し行動する必要性が再確認された。</p> <p>共同発表者：佐伯博美、佐藤文子、河井亜希子、奥亜紀乃、横島啓子</p>
51. 日当直で来院する小児科患者の実態調査をおこなって－外来での指導のあり方の一考察－	共	1989年10月	第38回共済医学会	<p>日当直における急患は小児科の占める割合が多く、緊急性に乏しい状態も少なくない。そこで急患で扱う小児の緊急度の実態を分析し、外来や病棟での母親との関わり、指導のあり方について考察した。</p>
52. 亜急性硬化性全脳炎患児外泊のための母親への生活指導について	共	1986年10月	第35回共済医学会	<p>亜急性硬化性全脳炎は、進行性の中樞神経系疾患で、発症6ヶ月から3年のうちに死亡するといわれている。8歳の男児について、可能な限り家族と共に過ごせる時間がもてるよう、母親に生活指導をおこない、外泊を実現させることができた経過を報告した。</p> <p>共同発表者：浜田祥江、横島啓子、他3名</p>
53. 患児の遊びについて	共	1985年10月	第34回共済医学会	<p>小児にとって「遊び」は発達の促進となり不可欠であるが、入院での処置や安静度等による制限から、十分に充足できないものでもある。そこで、療養環境の中に季節感を取り入れた遊びの工夫をおこない得られた効果について報告した。</p> <p>共同発表者：横島啓子、他4名</p>
54. 小児喘息患児と母親の指導について－喘息外来を利用してみた－	共	1984年10月	第33回共済医学会	<p>小児喘息発作の予防と対応についてのパンフレットを作成し、週1回の喘息外来で小児科外来看護師とチームを組み、患児および母親に指導を行った結果を報告した。</p> <p>共同発表者：作間由香、横島啓子、他3名</p>
3. 総説				
4. 芸術（建築模型等含む）・スポーツ分野の業績				
5. 報告発表・翻訳・編集・座談会・討論・発表等				
1. 実習で学ぼう！高齢者の退院支援	共	2015年09月	Clinical Study, Vol136, No10, p7～20	<p>退院後地域で生活する高齢患者に対する退院後の生活を見据えた看護の重要性、意義について解説を行った。疾病や障害をもつ高齢者が地域で生活するうえで生じる、身体的、心理的、社会的問題を挙げ、</p>

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
5. 報告発表・翻訳・編集・座談会・討論・発表等				
2. 近親者を無くし独居となった高齢者調査への挑戦	共	2015年05月	地域ケアリング, Vo117, No5, P. 54～56	入院中の患者を看護する上で、それらの問題をどう認識し、どのような看護を展開する必要があるかを解説し、実習でそのような患者を受け持った場合の心構え、学ぶべきポイントなどについても解説した。さらに高齢者の退院後の生活を考えるうえで前提となる社会資源について特に介護保険法の説明と実際に事例患者にどのような在宅サービスが該当するのか、読者が患者の状態と介護保険サービスを関連させて理解できるようにした。また、高齢者を支えるための国の新たな政策や各地のユニークな取り組みなどをピックアップしコラム的に紹介した。 共著者：横島啓子、杉浦圭子
3. パーキンソン病早期診断テストバッテリーに向けての基礎検討	共	2012年	順天堂医学, 58巻4号 P. 355	同居近親者死別による独居高齢者の生活と健康状態の変化を知り、近親者の喪失による独居高齢者へのダメージを軽減する方策を見いだすため、一次調査として、日蓮宗ビハラーネットワーク会員で寺院所属の関係者159件を対象にアンケート調査を行った。寺院関係者は遺族の死後の宗教行事の相談の他、生活の変化や健康に関する相談などに半数以上が応じており、遺族の身近な相談役の役割を果たしていた。また、寺院関係者側でも経験的に遺族の精神的変化や健康上の変化、生活環境の変化を捉えており、全人的な苦痛・悲観を受け止めていることが推測された。 共著者：美ノ谷新子、藤尾祐子、小川典子、横島啓子、福嶋龍子、米澤純子
4. クエスチョン・バンク ケアマネージャー 問題試験解説2010	共	2010年03月	メディックメディア	『平成23年度学長特別共同プロジェクト研究』として、パーキンソン病患者の早期診断のための行動テストに対する加齢および軽度認知機能障害の影響の基礎データを得ることを目標とした医学部との共同研究をおこなった。本学において開発された2x5順序手続き課題を今後運動疾患検査ツールとしての有用性を検証するために、基礎データとして健常被験者の成績を取得した。 共著者：吉見建二、近藤ふさえ、横島啓子、下泰司、北原エリ子
5. この1冊で合格！看護師国試頻出問題集'10年版	共	2009年09月	成美堂出版	第7回～第12回介護支援専門員実務研修受験試験問題についての、解説および解答のためのポイントを執筆および監修を行う。 本人担当部分：「介護療養型医療施設」「短期入所生活介護」「特定施設入所者生活介護」「認知症対応型共同生活介護」「介護老人福祉施設」「在宅での医療管理」の監修および第12回介護支援専門員実務研修受講試験の執筆をおこなった。 共著者：横島啓子、金沢善智、腰原公人、角田ますみ、土屋昭雄、中津川かおり、林裕栄、他8名
6. 看護師国家試験 ココがよくでる！重要項目'10年版	共	2009年09月	成美堂出版	第99回看護師国家試験に向けて、過去5年間（第94回～第98回）の看護師国家試験問題および模擬問題について解答解説の監修を行う。 本人担当部分：過去5年間の看護師国家試験問題の老年看護学分野について監修を行った。（P. 120～141） 共著者：吉田礼子、熊谷智子、秋元とし子、林真理子、蔵本文乃、中田芳子、中谷啓子、横島啓子、飯室淳子、今瀬繁子、他11名
7. クエスチョン・バンク ケアマネージャー 試験問題解説2009	共	2009年05月	メディックメディア	看護師国家試験における各科目について、重要項目の解説及び監修を行った。 本人担当部分：看護師国家試験における老年看護学分野についての重要項目の解説及び監修を行った。（P. 140～165） 共著者：熊谷智子、飛田美穂、吉田礼子、秋元とし子、林真理子、中田芳子、横島啓子、今瀬繁子、望月好子、瀧澤直子、他7名
8. クエスチョン・バンク 介護福祉士 国家試験問題解説2010	共	2009年05月	メディックメディア	第6回～第11回介護支援専門員実務研修受験試験問題についての、解説および解答のためのポイントを執筆および監修を行う。 本人担当部分：「介護療養型医療施設」「短期入所生活介護」「特定施設入所者生活介護」「認知症対応型共同生活介護」「介護老人福祉施設」について監修および第11回介護支援専門員実務研修受講試験の問題解説の執筆をおこなった。（P. 169～170, 177～179, 265～270, 280～283, 285～293, 別冊P. 14, 35～36） 共著者：金沢善智、角田ますみ、野々垣学、林裕栄、鉾丸俊一、松田大蔵、松村三枝子、水谷俊夫、宮崎伸一、横島啓子、他4名

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
5. 報告発表・翻訳・編集・座談会・討論・発表等				
9. ワイド特集 得意になる！	共	2008年11月	ナーシングカレッジ、Vol.12 No.13	本人担当部分：「介護技術」の項について監修および第21回介護福祉士国家試験の「介護技術」について問題解説を執筆した。(P.358～413, 別冊P.56～68) 共著者：赤羽克子、奥田紀久子、金子勝司、土屋昭雄、野々垣学、鉾丸俊一、松村美枝子、宮崎伸一、宮下公美子、横島啓子、他9名 高齢者の加齢に伴う心身社会的変化と老年看護学実習時に学生が陥りやすい高齢患者との関係性の戸惑いについて事例をもとに解説した。 本人担当部分：「高齢者の身体と心の変化を理解！」の章で、加齢に伴う身体的・精神変化の特徴と日常生活上での困難さについて解説した。(P.15～25)
10. 看護師国家試験 ココがよくでる！重要項目'09年版	共	2008年09月	成美堂出版	共著者：横島啓子、松尾千代、増渕優子 看護師国家試験における各科目について、重要項目の解説及び監修を行った。 本人担当部分：看護師国家試験における老年看護学分野についての重要項目の解説及び監修を行った。(P.132～157,188, 209～211) 共著者：熊谷智子、飛田美穂、吉田礼子、秋元とし子、林真理子、中田芳子、横島啓子、今瀬繁子、望月好子、瀧澤直子、他7名
11. この1冊で合格！看護師国試験出題問題集'09年版	共	2008年08月	成美堂出版	第98回看護師国家試験に向けて、過去5年間(第93回～第97回)の看護師国家試験問題および模擬問題について解答解説の監修を行う。 本人担当部分：過去5年間の看護師国家試験問題の老年看護学分野について監修を行った。(P.124～141) 共著者：熊谷智子、飛田美穂、吉田礼子、秋元とし子、林真理子、蔵本文乃、中田芳子、横島啓子、飯室淳子、今瀬繁子、他10名
12. クエスチョン・バンク ケアマネジャー 試験問題解説2008	共	2008年03月	メディックメディア	第6回(H15年度)～第10回(H19年度)介護支援専門員実務研修受講試験の解説および監修を行う。 本人担当部分：「介護療養型医療施設」「短期入所生活介護」「特定施設入所者生活介護」「認知症対応型共同生活介護」「介護老人福祉施設」の項を執筆した。(P.146～147,152～154,233～237, 245～248, 318, 341,351～353,355) 共著者：春日広美、金沢善智、佐藤正子、角田ますみ、遠山寛子、野々垣学、服部万里子、山田祐子、横島啓子、吉田聡、他6名
13. 事例から学ぶスラスラ実習記録 老年看護学実習の記録の書き方	単	2008年01月	Nursing College、Vol12 No1	高齢入院患者の残存機能活用の為の、老年看護学実習における情報の解釈と看護の方向性についてまとめた。
14. 看護師国家試験 ココがよくでる！重要項目'08年版	共	2007年12月	成美堂出版	看護師国家試験における各科目について、重要項目の解説及び監修を行った。 本人担当部分：「老年看護学」(P.132～157) 共著者：熊谷智子、今瀬繁子、飛田美穂、吉田礼子、秋元とし子、林真理子、丹澤洋子、中谷啓子、横島啓子、中田芳子、他8名
15. 高齢者のからだと心	単	2007年11月	看護学生、第55巻第8号	看護学生を対象に、高齢者の加齢に伴う身体的・精神的・社会的変化の特徴について執筆した。(P.8～11)
16. この1冊で合格！看護師国試験出題問題集'08年版	共	2007年09月	成美堂出版	第97回看護師国家試験に向けて、過去5年間(第92回～第96回)の看護師国家試験問題および模擬問題について解答解説の監修を行う。 本人担当部分：「老年看護学」(P.124～141) 共著者：熊谷智子、今瀬繁子、飛田美穂、吉田礼子、秋元とし子、林真理子、丹澤洋子、中谷啓子、横島啓子、中田芳子、他8名
17. 表題に“ジェンダー”を含む研究の動向(1996-2005年)－医学中央雑誌の分類“看護”に焦点をあてて－	共	2007年09月	東海大学医療技術短期大学総合研究施設論文集、第16 P.29～33	1996年から2005年に発表された研究の中でジェンダーという語を含み看護に分類された研究の総数は46件であった。そのシソーラスは、106種類であり多様性が認められた。その中で、使用頻度の上位2位を占めると性と性同一性はジェンダーの統制語であった。 共著者：小川景子、横島啓子、近藤誓子、金澤喜生美
18. この1冊で合格！看護師国試験出題問題集'07年版	共	2006年09月	成美堂出版	第96回看護師国家試験に向けて、過去5年間(第91回～第95回)の看護師国家試験問題および模擬問題について解答解説の監修を行う。 本人担当部分：「老年看護学」(P.120～141) 共著者：熊谷智子、今瀬繁子、飛田美穂、吉田礼子、秋元とし子、林真理子、丹澤洋子、中谷啓子、中村真理子、横島啓子、他8名

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
5. 報告発表・翻訳・編集・座談会・討論・発表等				
19. この1冊で合格！看護師国試頻出問題集 '06年版	共	2005年09月	成美堂出版	第95回看護師国家試験に向けて、過去5年間（第90回～第94回）の看護師国家試験問題および模擬問題について解答解説の監修を行う。 本人担当部分：「老年看護学」（P.120～141） 共著者：熊谷智子、今瀬繁子、飛田美徳、吉田礼子、秋元とし子、林真理子、長谷川やえ、丹澤洋子、中村真理子、横島啓子、他8名
20. 看護師国家試験問題集 2006年版	共	2005年04月	メジカルフレンド社、2003年度雑誌「クリニカルスタディ10月臨時増刊号」	オリジナル問題を掲載する 本人担当部分：P.307～321
21. この1冊で合格！看護師国試頻出問題集	共	2004年11月	成美堂出版	第94回看護師国家試験に向けて、過去5年間（第90回～第94回）の看護師国家試験問題および模擬問題について解答解説の監修を行う。 本人担当部分：「老年看護学」（P.120～141） 共著者：熊谷智子、飛田美徳、吉田礼子、長谷川やえ、丹澤洋子、中谷啓子、五十嵐典子、中村真理子、横島啓子、中田芳子、他6名
22. 看護師国家試験パワーアップ予想問題	共	2003年10月	メジカルフレンド社、雑誌「クリニカルスタディ10月臨時増刊号」	国家試験出題基準に則って老年看護学の予想問題を作成した。 本人担当部分：「老年看護学」（P.66～73） 共著者：水沢伸夫、新見明子、林千加子、黒田裕子、熊倉みつ子、鈴木けい子、上瀧博子、横島啓子、中垣紀子、渡辺美徳、他2名（収載順）
23. ナーシング・ケアサービスコンテンツ作成	共	2003年08月	ナーシングケアサービスシステム	インターネットを利用した「訪問看護システム」のシステム構築と、標準看護計画「健康増進／生活意欲向上」「在宅サービスの利用軽減」「心身の問題の徴候／施設入所リスク」の執筆を担当する。 訪問看護支援システム「Nursing Eye」としてCD化。
24. 第92回看護師国家試験解説 国試210問	共	2003年05月	日本看護協会出版会	2002年度第92回看護師国家試験の老年看護学状況設定問題の一部を解説した。
6. 研究費の取得状況				
1. ロボットを用いた認知症高齢者に対するセルフモニタリングシステムの構築	共	2017年～2019年	科学研究費補助金基盤研究(C)	本研究ではセルフモニタリングの手法を軽度認知症高齢者でも実施可能な方法として、音声・画像を記録できるコミュニケーションロボットを用いて実践する。現在コミュニケーションロボットはインターネット環境を必要とするが、インターネット環境を必要としない動作環境を構築し、独居高齢者及び認知症高齢者の介護予防を目的としたシステムを実現することを目的とする。 共同研究者：横島啓子（代表）、杉浦圭子、久山かおる、福尾恵介、徳重あつ子
2. 都市部無縁社会における社会的孤立予防プログラム・地域ネットワーク構築に関する研究	共	2017年～2019	科学研究費補助金基盤研究(C)	高齢者の社会的孤立に関して、【①都市部に居住する独居高齢者に対して、個別的に自発性を含む交流頻度と活動状況、心身の状況を詳細に把握する。】 【②都市公営住宅を一単位とし、独居高齢者の社会的孤立の状況および主観的幸福感などの精神的指標との関連性を検討する（量的解析）。また、将来的なICT（Internet CommunicationTechnology）の活用も想定し、基本的なインターネット環境なども把握する。】これらのデータ収集、解析より新しい観点からの介入アプローチの構築の一助とすることを目的とする。 共同研究者：杉浦圭子（代表）、横島啓子（分担）、福尾恵介
3. ICTを活用した独居高齢者の生活・健康状態把握のためのプログラム開発	共	2016年	平成28年度 科研費学内奨励金	独居高齢者の健康状態・生活リズム・精神状態の日内変動を捉えることができるプログラムの開発を行うこととする。具体的には、バーコードリーダーを用い、簡単な絵文字を使い自らの状況・感情が発信できるシステムをプログラムし、高齢者から発信された情報を分析する。 共同研究者：横島啓子（代表）、杉浦圭子、久山かおる
4. 大腿骨近位部骨折で治療を受ける高齢患者のせん妄発症を予測する看護師の判断	共	2016年	公益社団法人木村看護教育振興財団	整形外科病棟の大腿骨近位部骨折患者のせん妄を予測する看護師の判断について、一般的な急性期病院の看護師と認定看護師や専門看護師といった専門性の高い看護師の支援を受けることができる急性期病院の看護師を対象にインタビュー調査を行う。2群比較をテキストマイニング分析により検討し、せん妄予測及び看護実践の結果を現任教育につなげていくことを目的とする。 共同研究者：梅澤路絵（代表）、横島啓子、久山かおる
5. 介護老人福祉施設における看護・	共	2014年	順天堂大学保健看護学	全国200施設の介護老人福祉施設に勤務する看護職及

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
6. 研究費の取得状況				
介護職員の看取りケアに関する現状と今後の課題			部共同研究助成	び介護職に対してアンケート調査を実施し、看取りケアの実態と課題を検討した。 共同研究者：横島啓子（代表）、黒川佳子、長沼淳、松浦美織
6. 高齢介護者のための多職種間ウェブ・対面相補型ネットワークの構築	共	2013年～2015	科学研究費補助金 挑戦的萌芽研究	介護力不足が懸念される高齢者夫婦世帯および単身高齢者を対象に、参加観察法による退院時カンファレンスの実態調査と半構成面接法による退院後のフォローアップ調査を実施し、介護支援の実態を客観的に分析する。さらに、ウェブの活用と対面との連携による、医療・福祉他職種間在宅介護支援ネットワークを構築する。 共同研究者：横島啓子（代表）、前野博、藤尾祐子
7. 介護重度化予防を目的に「低栄養改善」のための「在宅・施設連携ケアモデル」の構築	共	2013年～2015	科学研究費補助金基盤研究(C)	要介護高齢者の栄養状態とサービス従事者の「低栄養改善」に対する意識について実態を明らかにし、介護保険制度における在宅サービスと施設サービスが連携して、要介護高齢者の介護重度化予防を可能とする「低栄養改善」のための「在宅・施設連携ケアモデル」を構築する。 共同研究者：藤尾祐子（代表）、横島啓子（分担）、小川典子
8. 同居近親者死別による独居高齢者の生活と健康の変化	共	2012年～2014	科学研究費補助金挑戦的萌芽研究	同居近親者死別による独居高齢者の生活の変化、健康状態の変化を知り、同居者の死に対するストレスとの関係を明らかにし、同居近親者の喪失による独居高齢者のダメージを軽減する方策を見出すことを目的とする。 共同研究者：美ノ谷新子（代表）、米澤純子、小川典子、横島啓子（分担）、福嶋龍子
9. 高齢者の生活背景と手続き記憶との関連	共	2012年	順天堂大学保健看護学部共同研究助成	60歳以上の高齢者を対象に、2×5順序手続き記憶装置を用いて、記憶誘導性順序課題を実施する。さらに、認知記憶検査、生活背景を調査し、タスク達成状況と生活背景との関連を検討した。 共同研究者：横島啓子（代表）、藤尾祐子、黒川佳子、近藤ふさえ、吉尾千世子
10. 看護ニーズに対応した実践コミュニケーション併設型医療英語教育ハイブリッドモデルの開発	共	2012年～2014	科学研究費補助金基盤研究(C)	専用ウェブサイトで外国人リーダーとのインタラクションによるウェブ学習を行い、看護系学部・学科学生の英語力向上を資することを旨とする。 共同研究者：山下巖（代表）、横島啓子（分担）、佐藤健
11. パーキンソン病早期診断テストバッテリーに向けての基礎検討	共	2011年	順天堂大学学長特別共同プロジェクト研究	パーキンソン病患者の早期診断のための行動テストに対する加齢および軽度認知機能障害の影響に関する基礎データを得ることを目的とし、2×5順序手続き学習装置を用いて調査を行った。 共同研究者：吉見建二（代表）、近藤ふさえ、横島啓子、下泰司、北原エリ子
12. 老年看護学実習における学生指導のあり方に関する研究－療養病院での学生の実習到達度と臨床実習指導内容の分析から－	共	2007年	東海大学医療技術短期大学看護総合研究所研究助成	療養病院実習における学生の実習評価およびECTB評価スケールを用いた臨地実習指導者の指導評価を分析し、効果的な実習指導の方策を検討した。 共同研究者：横島啓子（代表）、飯室淳子

学会及び社会における活動等

年月日	事項